



一人一句

令和八年六月一人一句

第四二六回

兼題・お花畑・夏季雑詠

険し峰越えて眼福お花畑

里美

佳き香して供花の芍薬華麗なり

里美

掛川の新茶と聞けば寄りもして

和宏

万緑や石仏多き旧街道

昭子

魂眠る岩場見えきてお花畑

敏子

登りきるお花畑の浄土かな

恵子

十薬は八重咲班入り園芸好き

寿子

空椀に殻のどつさり蜆汁

訓

公園の時計は正午夏日かな

潤一郎

焼き印に突と跳ねけりお花畑

六斗